

与那国の聖地と祭祀（1）

与那覇仁一・波照間永吉

はじめに

与那国島は沖縄の最西端に位置し、沖縄の島々が互いにその島影を望み見ることができるのに比して、ほとんど大海に孤立した島である。時に西表島や台湾の島影を望見することができるが、これも一年の内では稀である。八重山の歌謡で与那国島を「一本島」（ピトゥムトゥシマ）と呼ぶのはそのような島の地理的位相によるものであろう。それゆえ、島の言語・民俗はかなり特色ある様相を呈し、例えば、与那国方言については八重山方言に下位区分する考えもあるが、八重山方言とは別に与那国方言として独立させる考えもあるほどに異なっている⁽¹⁾。

本稿では、そのような独自の言語生活とともに営まれている与那国島の民俗の象徴としての御嶽（ウアン）などの聖地に関わる信仰と年中祭祀について、その過去と現在を祭祀の現地調査と聞き取り調査に基づいて記述したい。

本稿の基となった資料についてであるが、与那覇仁一の調査は多年にわたるもので年次等の特定は出来ない。与那覇は、長年与那国町教育委員会に勤務し、文化行政の立場から島の祭祀に関わるとともに、生活者としては祭祀集団の一員となって島の祭祀に参加してきた。その知識は、島の古老らからの聞き取りと祭祀集団内部の情報とが一体となって形成されてきたものである。波照間永吉による調査は、1984年7月～8月に行った御嶽調査⁽²⁾を手始めに、1989年12月～1990年1月に行ったカンブナガ調査⁽³⁾およびその後の沖縄県立芸術大学附属研究所の行った民俗調査によるものが中心となっている。与那覇と波照間の共同の作業（与那覇からの波照間の聞き取り）は2002年2月12・13・14日、2003年2月28日・3月1日の都合5日間行ってきている。

より具体的で正確な与那国の祭祀についての報告は、実際の祭祀の参与観察（調査）を行うと同時に、広範な聞き取り調査を行うことによって実現さ

れるはずである。ともあれ、今回は与那国島の祭祀習俗全般に関する予備的報告として提示しておきたい。

記述はまず最初に、与那覇が案内者となり波照間が行った与那国島の聖地のフィールドワーク⁽⁴⁾の報告から行う。次いで村落レベルで行われる年中祭祀の概略とそれに関わる司祭者・祭具・供物などについて与那覇の持っている知識・情報を網羅して記述を進めることにする。しかし、聞き取り調査の持つ限界と波照間自身の力量の問題から、与那覇が収集した知識・情報をすべて記述することができているとは言い難い。祭祀の現場に臨んでの調査を含めた継続調査が必要とされる所以である。

本稿は「1、与那国島の祭祀場」「2、(与那国島の) 神役組織」「3、与那国島の祭祀」の3部よりなるが、紙幅の都合により本号では与那国島の聖地と神役組織について報告する。なお、各御嶽(ウアン)の実測図は1984年実施の調査報告書『御嶽 御嶽信仰習俗分布調査(Ⅲ)一宮古諸島および八重山諸島⁽⁵⁾』のために玉城義実氏が作成したものである。この実測図は与那国島のウアンの形態を理解する上で必須であり、上記調査報告書の入手が困難になった現在、同図を再掲することは与那国の御嶽についての理解を促進し、本稿の目的をより確実に達してくれるものと思う。掲載をご許可下さった玉城義実氏と同書の利用を許して下さった玉城政美・大城學両氏に感謝の意を表したい。写真は筆者(波照間永吉)の撮影にかかるものである。

1、与那国島の祭祀場

(1) ウアン(御嶽)

祭祀場には御嶽と拝所がある。御嶽はウアン〔uŋaŋ〕と発音される。オガン > ウガン > ウアンという変化であろう。オガンは「拝み」が語源と考えられる。与那国島には13のウアンがある。琉球国各地の御嶽について、名称とその聖名、そして祀られる神の名(神名・イベ名)を記した『琉球国由来記』(1713年成立)にはなぜか与那国島のウアンおよび年中祭祀の記述がない。沖縄県文化課が1984年に行った上記の「御嶽調査」でその13のウアンを確認した。トゥヤマウアン(十山御嶽)・ティウアン(ティ御嶽)・トゥマイウアン(泊御嶽)・ヌックウアン(野底御嶽)・ウヤバルウアン(親原御嶽)・

アラガウアン（新川御嶽）・ナウンニウアン（ナウンニ御嶽）・トゥグルウアン（トゥグル御嶽）・ディティグウアン（ディティグ御嶽）・クブラウアン（久部良御嶽）・ンディウアン（ンディ御嶽）・ンダンウアン（帆安御嶽）・ウラヌウアン（浦野御嶽）である。まず、これらのウアンについて概略を紹介する。⁽⁶⁾ 次いで、その他の拝所について簡単に紹介する。

なお、これら聖地の所在地点については本稿の「与那国島の聖地（拝所）地点図」をご参照いただきたい。

1) トゥヤマウアン（十山御嶽）

祖納の海岸寄りの地にある。現在は集落の中に位置するが、かつてはウアンの後方50メートルはナンタ浜であった。2) 以下の12の御嶽のうち10のヤマを統括するという目的で創建された。それで「十山」(「山」は御嶽のことをいう語) の名が冠された(ウヤバルウアン、アラガウガンの項参照)。2) 以下のウアンが、古い集落跡およびその周辺の地に位置し、現在の集落から離れた原野や山中にあることによる不便解消のための合祀という。島のウアンの中では最も格が高い。

入り口に八重山の御嶽中最大のコンクリート製の鳥居が立ち、瓦葺きの拝屋、その後方にコンクリート製の祠がある。鳥居と拝屋の間が神庭である。与那国島のウアンの中では群を抜いて広大な嶽域を有している。(図1、写真1参照)。

祭神はチマガニンソウダルミマタヌチ(島のニンソウダルミマタ主、または島金のソウダルミマタ主か?)で、島の豊饒と航海守護の神とされる。

豊年祭(ウガンフトゥティ)には島中の祈願がこのウアンでなされるほか、各集落の旗頭が集まり神庭の舞台では奉納芸能が演じられる。また、カンブナガの祭祀終了の報告もここで行われる。雨乞いもここで行われ、雨乞いの神歌には「一、だまとやま かんぬまい／一、ちまかりる みてやりや(中略)／一、ぐさぐぬ みでぬかみ／一、ななさぐぬ みでぬかみ／一、ふらしやひり かんぬまい／一、たしきやひり かんぬまい」(御嶽・十山の神様／島が枯れる際ですので／五作の水の神／七作の水の神／雨を降らして下さい、神様／助けて下さい、神様)と、このウアンの神に祈る詞章がある。

また、旧暦の毎月朔日と十五日には「十三名の司と村の世話役が十山御嶽に参集して、暴風、早魃、海上遭難、疫病等がないように、常に島内安穩、豊作大漁であるように、祈願を行う⁽⁷⁾」。

2) ティウアン (ティ御嶽)

祖納集落の西方、ナンタ浜 (港) への下り口 (現在は護岸道路) 脇の小さな丘にある。アダンやユウナなどの海岸植物の繁茂する中にコンクリート製の祠があるだけである。祠の背面壁は無い。嶽域を示す物はなく、鳥居などもない。祠の中に香炉一基と花瓶一对が置かれている。(図2、写真2参照)。

祭神はニイヌティヌチ (ニイの津口 = 港主)。御嶽の由来から航海の安全を守護する神であることが分かる。ウアンの立地もこのことを物語っているよう。祖納の松原家の人々が信仰するいわゆる「家御嶽」(石垣島四ヶ村でいうイチムンオン〈一門御嶽〉) である。現在はクニティ (旧暦九月九日に行われる村中および一家の健康祈願祭) の祭祀が行われる。

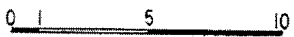
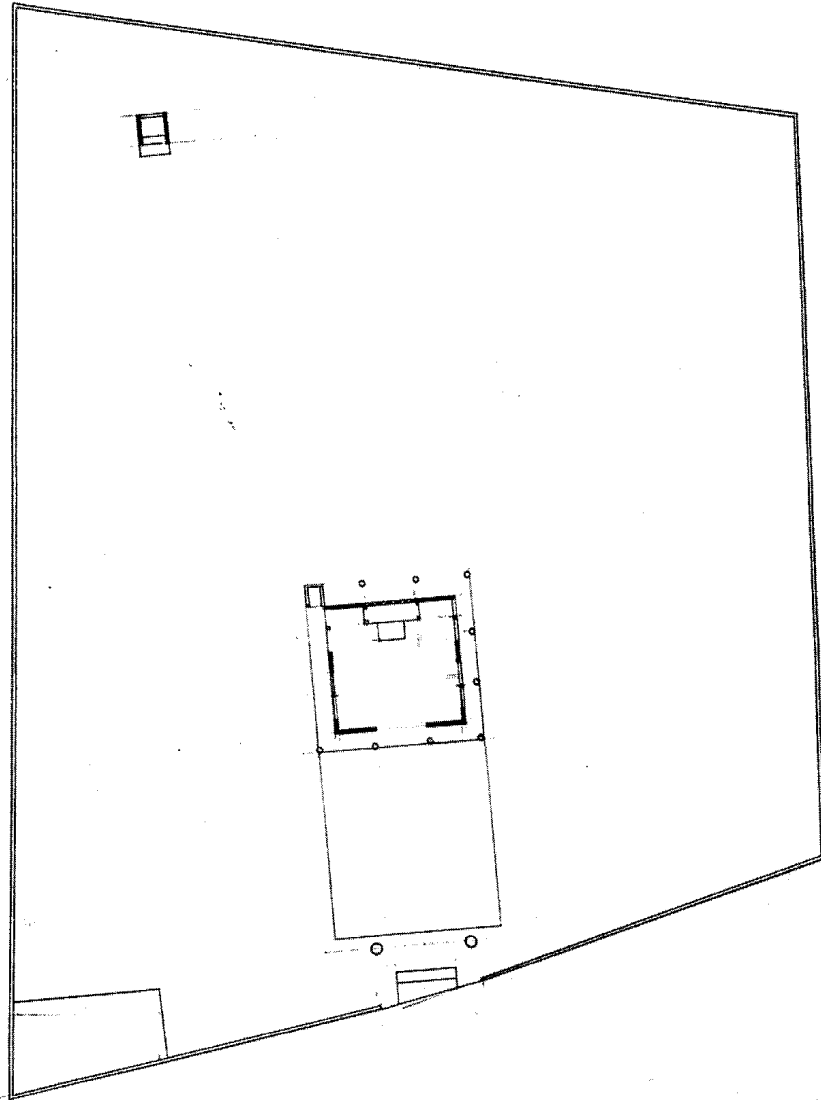
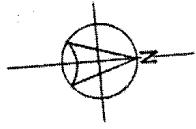
3) トゥマイウアン (泊御嶽)

祖納集落の西端近く、田原川の河口近くのティンダバナ崖下に位置する。目の前はナンタ浜である。町役場方向へ向かう県道とナンタ港へ向かう県道がT字状に交差する角にある。交差点の左手にユウナやアダンなどの生えた広場があり、そこに総コンクリート製の小祠がある。祠の背面壁は無い。嶽域を示す物は無く、鳥居も無い。祠の床に香炉一基と花瓶一对が置かれている。

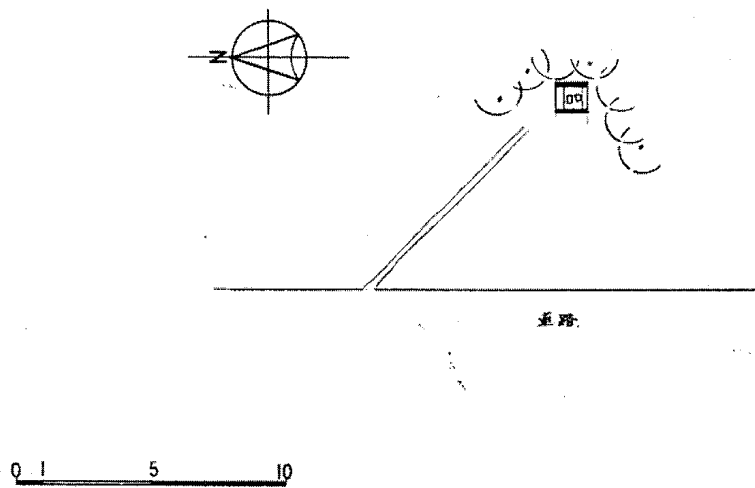
祭神はチマナギミテヌチ (島ナギミテ主、または島ナギ道主か?)。航海安全と港を守護するウアンであることはウアンの名前から推察される。このウアンも松原家にゆかりがあるとされる。クニティの祭祀が行われる。(図3、写真3参照)。ちなみに、島仲部落の人々がこのウアン付近に定着したのは1920年代に入ってからである。

4) ヌックウアン (野底御嶽)

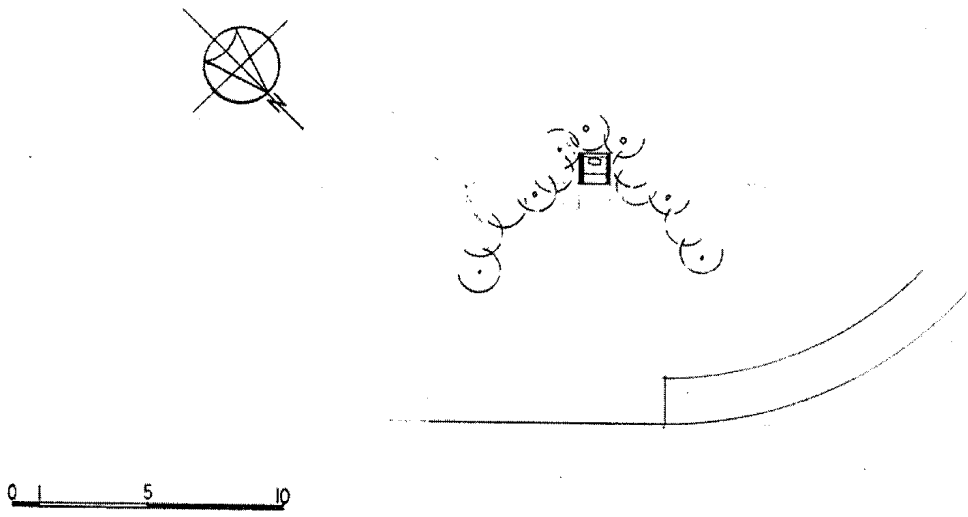
ティンダバナの崖上にある。位置的にはティンダバナ展望台の南東方向、電波塔のほぼ下にあたる地点にある (1984年8月時点では、塔の下、西方30メートルの所にヌックウアンを示す白い標注が立っていた)。一帯はユウナ・クロツグ・ガジマルなどの繁茂する森で、その中にウアンがある。嶽域は高



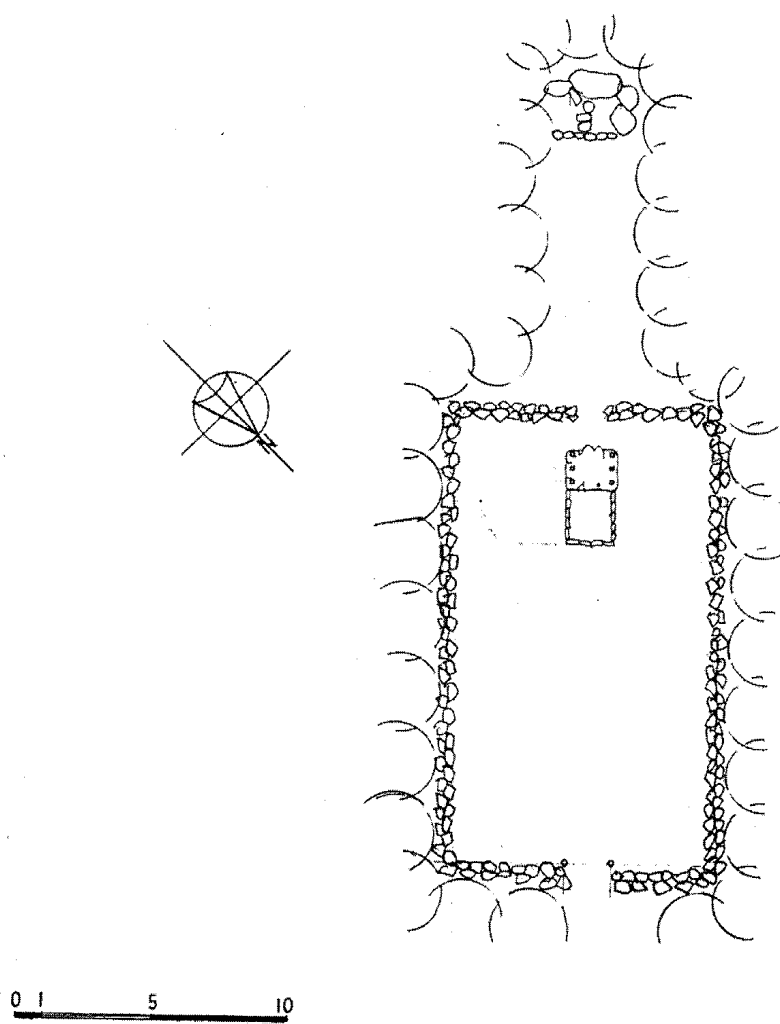
〈図1 トウヤマウアン〉



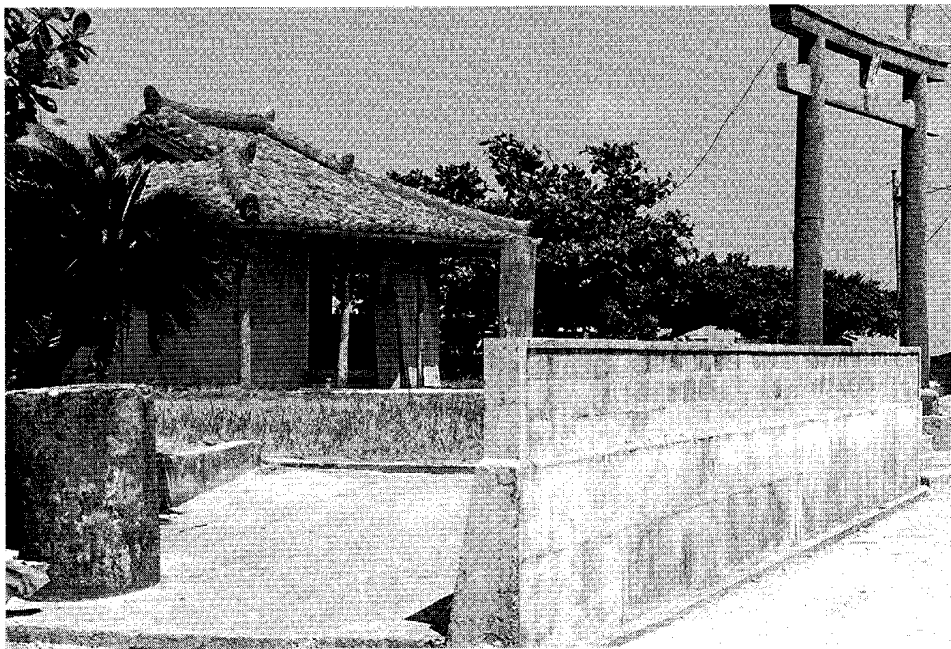
〈図2 ティウアン〉



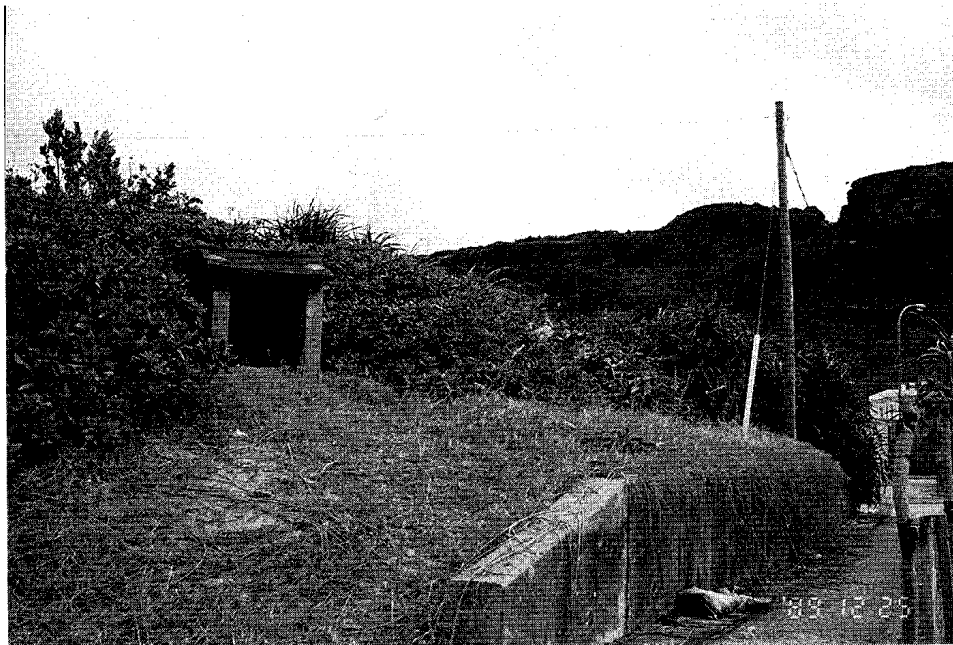
〈図3 トゥマイウアン〉



〈図4 ヌックウアン〉



〈写真1 トウヤマウアン〉



〈写真2 ティウアン〉



〈写真3 トゥマイウアン〉

さ約30cm程の低い石垣で囲まれている。入り口には鳥居が立っている。それをくぐると神庭で、神庭の奥に木造瓦葺きの祠が建っている（いた）。祠の床の上には香炉一基と花瓶一对が置かれている。花瓶の脇には燭台一基、茶碗1個、貝殻4個がある（あった）。祠の後方は石垣が切れ、その奥にクツツァ（御嶽の神の鎮座する至聖所であるイビに相当すると思われる）がある。クツツァには大岩があり、その前に砂岩の切石が敷かれ、その中央部に砂岩製の円筒型の香炉が一基置かれている。（図4参照）。

祭神は未詳。航海安全を守護する神とされる。旧島仲集落との関係が考えられるが、伝承ではトゥマイウアンとは兄妹関係にあり、ヌックウアンでの祭祀が先で、その後にトゥマイウアンで祭祀を行い、それが終わると松原家での祭祀となるという⁽⁸⁾。クニティの祭祀が行われる。

5) ウヤバルウアン（親原御嶽）

祖納集落の南西方、旧島仲集落の西側に位置する。フクギ・ユーナ・ガジマルなどの樹木の繁茂する森の中にある。ウアンへは幅2メートル程の神道が開かれているがクワズイモなどの植物が繁茂して、サトウキビ畑との境界が不明瞭となっている。この神道を進むとウアン入口に至る参道となる。参道の間程の所に鳥居が立っていた痕跡が確認される（された）。その奥が神庭で、神庭の奥に木造瓦葺きの祠がある（あった）。この祠は左側に傾き、

崩壊寸前のように見受けられる（られた）。祠の床（板敷き）には白色の大型の円形陶製香炉一基、花瓶一对、湯飲み茶碗一对が置かれている。また、祠の前の地面に小型の青色陶製円形香炉一基が置かれている。祠の後方にクツァがある。クロツグ一株が生えているがその前に逆凹型に赤瓦（女瓦）を敷き、その中央部に香炉、花瓶が置かれているがあまり手入れされていないようである。（図5、写真4参照）。

祭神は未詳。島仲村の旅の安全守護の神のようである。島仲村との関わりはンマナガマチリ（島仲祭り）がこのウアンで行われるところからも知られる。伝承では、石垣島の蔵元に呼び出された兄の無事を祈願するために家にビディリを立て、その妹が祭祀を行ったところ、その願いが叶い兄は無事帰島することが出来た。「それから旅立ちの御嶽とされるようになり、旅に行くものの無事を祈難^(ママ)する御嶽⁽⁹⁾となった」という。また、一説ではこのウアンは「後世に創設されたもので、十山に入るべきお嶽ではないと云われ」、十山御嶽の名称は、アラガとナウンニの両ウアンで一山と数えることと併せ、「その訳で十山になっている⁽¹⁰⁾」という。クニティとカンブナガのンマナガマチリの祭祀が行われる。

6) アラガウアン（新川御嶽）

旧島仲集落の御嶽。このことは祭神の名に「チマナガ（島仲）」とあることと、この御嶽がカンブナガのンマナガマチリの祭祀場となることから明らかである。島のほぼ中央部に位置するトゥング田の近くにある森中に位置する。トゥング田から右折しT字路を右折した農道の左手の森にある。右手の森にはナウンニウアンがある。本来、両ウアンは一つの森（ヤマ）に位置していたわけである（それで、アラガウアンとナウンニウアンで一山と数える⁽¹¹⁾）。周囲はサトウキビ畑である。

入り口にはコンクリート製の鳥居が立ち、その奥に神庭、神庭の奥部にコンクリート壁で瓦葺きの祠がある。その床に香炉一基と花瓶一对が置かれている。この祠の後方にもコンクリート製の床があり、そこには香炉二基と花瓶二対が置かれている。（図6、写真5参照）。

祭神はチマナガデンヌチ（島仲デン主）。旧暦八月庚辛の日にアラガダトゥタカビ（新川ダトゥ崇べ。災害除去の祈願）、クニティ、ンマナガマチリ（島

仲祭り。カンブナガの時の島仲集落跡での祭祀)の祭祀が行われる。ちなみに、アラガダトゥタカビの日には、与那国島の司の始まりとされる「富里家の祖先に当るムトカ・ハマイ」の墓地を村の世話役が清掃し、「司及び部落総代の礼拝が行なわれ⁽¹²⁾」た。また1892年頃まではウテナン・サシナン（掟阿母・佐事阿母）という、与那国島に渡ってきた神女の墓地を村から賦役が出て清掃し、司一行が祭事を行なっていた⁽¹³⁾という。

7) ナウンニウアン（ナウンニ御嶽）

アラガウアンと向かい合う森の中にある。嶽域は不明確で、樹木の枝が交差し覆い被さる下に総コンクリート製の祠がある。前面・背面に壁は無く、吹き抜き。その床に平たい砂岩が置かれ、その上に香炉一基と花瓶一对が置かれている。祠の後方にはクツツァがあり、石灰岩製の直方体の香炉一基と花瓶一本が置かれている。(図7、写真6参照)。

祭神はウヤバルブナダラ（親原女按司）。この神名からすると、このウアンの神は女性の支配者、あるいは按司的人物（地域支配者）たる婦人に由来するものらしい。このウアンはナウンニ村というサカイイソバ時代前後（15世紀末頃か）に存在した古邑と関わるものであろう。「島仲村は、この後村^(ママ)のサンアイ村のナウンニ村との合併によって出来た村であって、ナウンニ村のトニは友利家の屋敷跡にある」。「ナウンニの東隣りに」はブシキ村というサンアイ村の前に栄えた村があった、⁽¹⁴⁾という。クニティの祭祀が行われる。

8) トウグルウアン（トウグル御嶽）

与那国空港から久部良部落に向かって数百メートル行った道路の左側に位置する。空港—久部良線道路を左折し、これを70メートル程行くと右手に折れる道路があり、これを約50メートル程入ると左手にフクギを主体とする森がある。この森の中にある。

嶽域は石垣で囲われ、正面にコンクリート製の鳥居が立っている。そこを入ると神庭となり、神庭の奥に木造瓦葺きの祠がある。祠内は人が直立することが出来ない程のものであるが、祭祀の時にはッカーアブ（司姥。神女）はここに供物を饗り、自らもこの中に入って拝礼をなすという。この祠のすぐ後ろに高さ数十センチに盛り土され、石垣で囲われた小空間がある。ここに五角形をした砂岩が立てられ、その前に香炉が5基置かれている。その内

の2基のみが通常の置かれ方で、3基は伏せられている。

祭神はトゥグルウリタビガンヌチ（トゥグルウリ旅神主）で、航海安全を守護する神である。このことと深く関わると思われるのは与那国の古謡「トゥグルダキディラバ」である。同歌は航海安全を予祝する歌謡で、トゥグル岳から吹く南西風が常に安定していることを祈るものである。さらに、このウアンはかつてのトゥグル村（14世紀頃の遺跡とされるトゥグル遺跡がある）やトゥグル岳とも深く関わるものであろう。もっとも、この一帯は、トゥグルの名をいただくトゥグル浜・トゥグル岳・トゥグル遺跡などからは若干隔たっており、その関係の考察については注意が要される。（図8、写真7 a・b参照）。

9) ディティグウアン（ディティグ御嶽）

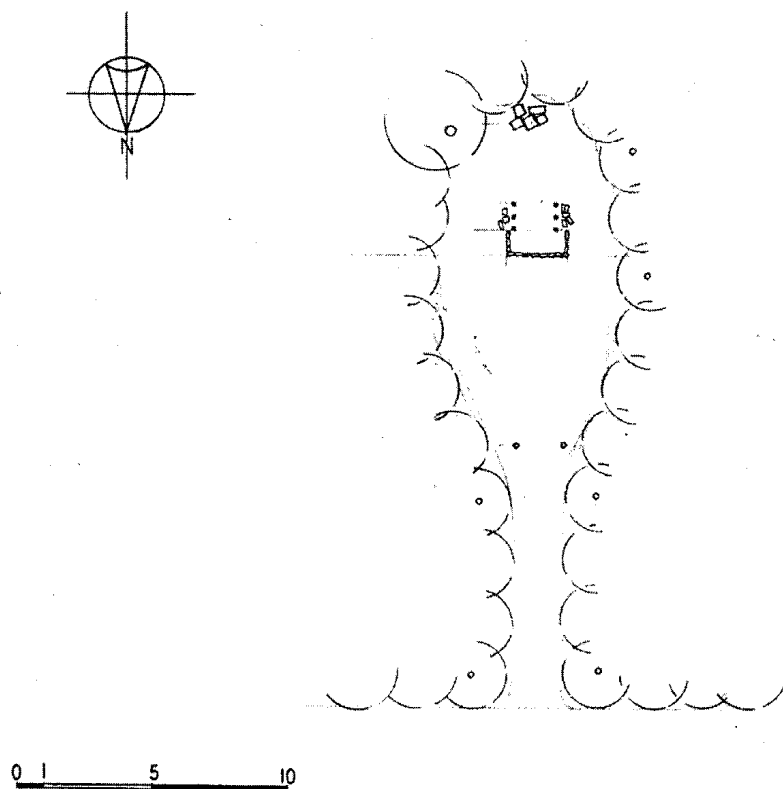
空港から久部良部落に向かう県道を部落手前で右に折れ、200メートルほど入った左手の森にある。この一帯をディティグ山と呼んでいる。道路から約30メートルの地点にこのウアンの白い標柱が立っている（いた）。この標柱から20メートルほど入ったところがウアンである。嶽域は石垣で囲われている。鳥居はなく、小さな間口の門を入ると最奥部に崩れかけた木造の祠がある（あった）。屋根部は完全に崩れ落ちている（いた）。祠の中には香炉一基と花瓶一対が置かれている。（図9、写真8参照）。近年、従来の祠とは別形式の祠が新に建立された。

祭神はヒトゥミバナブナダラ（ヒトゥミバナ女按司）。この神名からすると、このウアンの神は女性の支配者、あるいは按司的人物（地域支配者）たる婦人に由来するものらしい。クニティの祭祀が行われる。どの村の祭祀にかかるかは未調査。

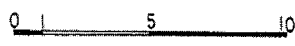
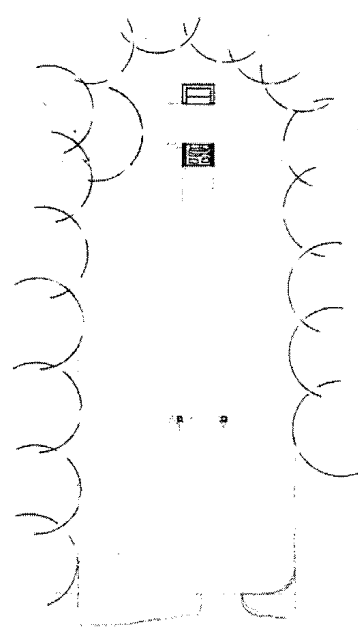
10) クブラウアン（久部良御嶽）

久部良部落内にある。久部良港岸、クブラミットウ（沼湖名）から港にそそぐ久部良川右岸の道路沿いに位置する。ウアン左手はやや小高い丘で、入り口にコンクリート製の鳥居がある。鳥居をくぐるとクロトンが植えられた拝所があり、その奥にコンクリート壁・瓦葺き祠がある。その床に香炉が一基置かれている。（図10、写真9参照）。

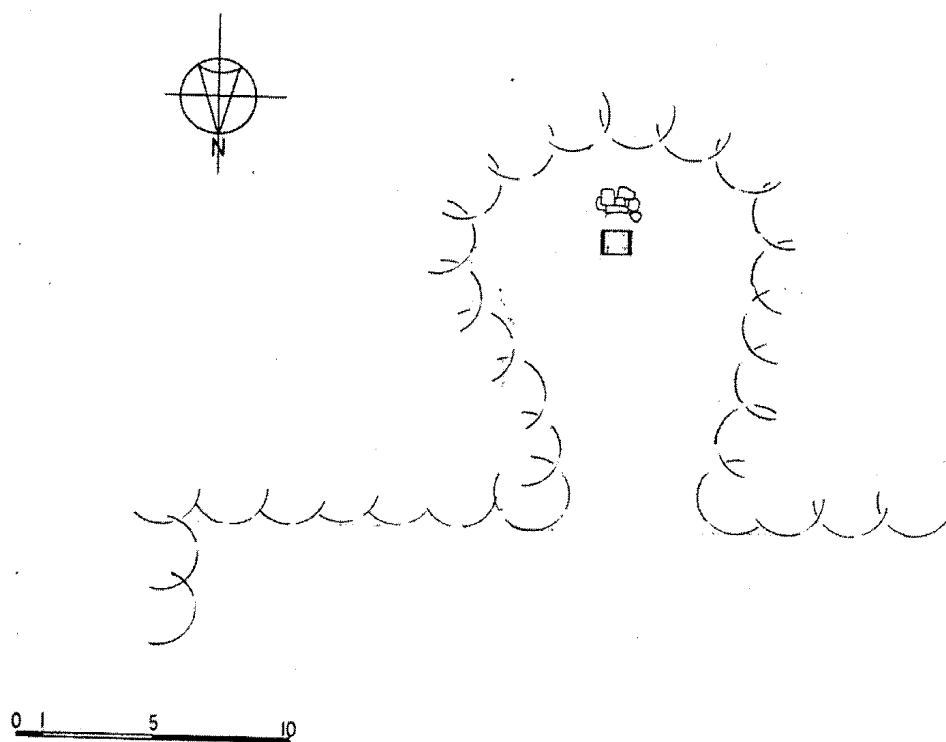
島・村落守護の御嶽で「異国船・大国船が、与那国へ寄せてくれるなど祈



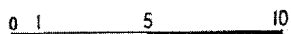
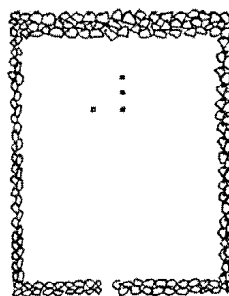
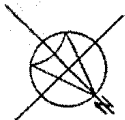
〈図5 ウヤバルウアン〉



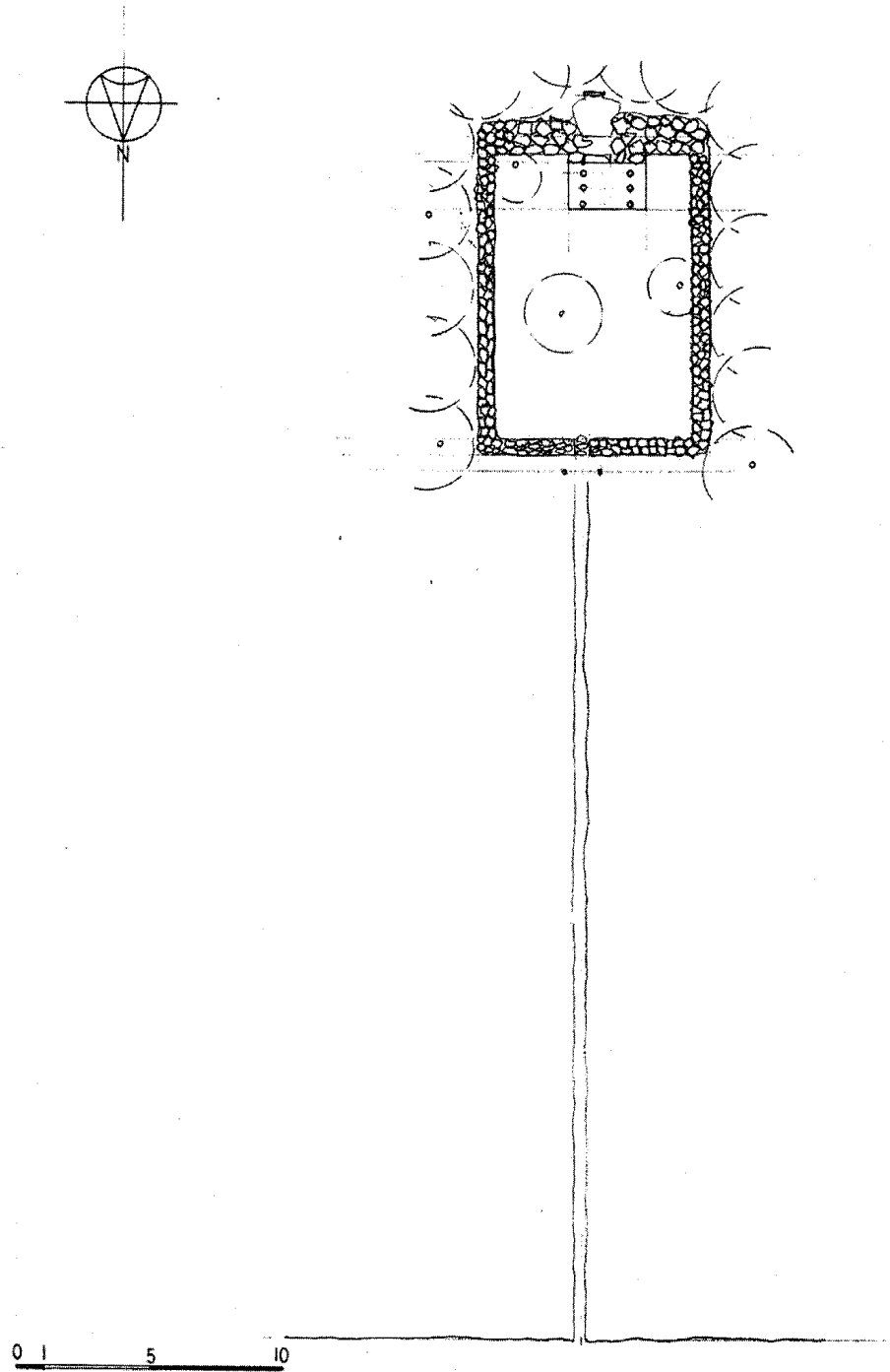
〈図6 アラガウアン〉



〈図7 ナウンニウアン〉



〈図9 ディティグウアン〉



〈図8 トゥグルウアン〉



〈写真4 ウヤバルウアン〉



〈写真5 アラガウアン〉



〈写真6 ナウンニウアン〉



〈写真7 a トウグルウアン〉



〈写真7b トゥグルウアン〉



〈写真8 ディティグウアン〉

願するお嶽である。(中略) 今日では漁業がさかんになり、海上安泰大漁祈願の神としても祈りつづけられて来ている⁽¹⁵⁾」。

祭神はイユンイリミサテ・トンダバニヌチ(イユン西御崎・トンダバニ主)。ドゥガヌチ(四日の日=五月四日のハーリー。豊漁祈願の祭祀)の祈願が行われる他、クニティの祭祀が行われる。なお、1918年に旧島仲村からトゥグル浜一帯に移住した一部の人々は、その2年程後には久部良部落に移住したという。

11) インディウアン(インディ御嶽)

比川部落の前方、カタバル浜の護岸の近くに位置する。インディは比川村の方言呼称だが、語源などは不明。ユウナやアダンの繁茂し密林状態であるが、ウアンのある一画のみは樹木が伐り開かれている。その空間の最奥部に総コンクリート製の祠がある。祠は前面・背面ともに壁は無く、吹き抜き。その床に香炉一基と花瓶一対が置かれている。祠の後方にはクツァと呼ばれる聖域がある。1984年8月の調査時には、豊年祭の祭祀で用いたとみられる、クバの葉を楕円形に結んで作った13ヶの香炉が、祠に向かって左側に東向きで1列に並べられてあった。(図11、写真10参照)。

祭神はハイミウブダキ・ウブムイフチヌチ(南風見大嶽・大杜フチ主)で、比川部落随一の守護神。婿取り・嫁取り、家庭円満を守る神という。ウアンフトウティ(御願解き=豊穰感謝祭)、クニティの祭祀が行われる。

12) インダンウアン(帆安御嶽)

祖納部落からサンニヌダイに行く約2キロメートルの地点に位置する森の中にある。森はクロキ・フクギ・ガジマル・ヤマカズラなどで構成されている。嶽域は石垣で囲まれ、嶽域内神庭は比較的手入れが行き届いている。鳥居はない。入口を入ると神庭で、その奥にコンクリート壁・瓦葺きの祠がある。祠は前面・背面ともに壁は無く、吹き抜き。祠の床にピラミッド状に3段に重ねた石壇があり、一番上に大きな香炉一基、二段目と一番下の段にはそれぞれ2基の香炉が置かれている。(図12参照)。

祭神はウブンダニクンダニンサテウリマイヌチ(大種子小種子ンサテ下り米主)という。神名からすると稲作に代表される農耕に関わる神だと思われる。別伝承での祭神はヌコイタムイヌチ(ヌコイタムイ主)⁽¹⁶⁾である。ヌコイ

タムイ主の方の語義その他は不明である。クニティの祭祀が行われる。この祭祀が行われることからすると健康守護さらには家内安全守護の神かと思われる。旧ンダン村に関わるウアンであろう。

13) ウラヌウアン（浦野御嶽）

祖納部落の東方に位置する。旧浦野村の跡地に所在するとされる⁽¹⁷⁾。祖納より東崎へ到る道路を約1キロメートル行くと「東崎」の標識がある(あった)。この標識の付近に左手へ折れる農道があり、それを約50メートル行くと右手にフクギ・ガジマル・クロキなどの茂った森がある。その中にある。ウアンの西側に浦野遺跡、東側に浦野墓地がある。嶽域は石垣で囲われ、鳥居はない。入るとすぐに神庭があり、神庭の奥に木造瓦葺きの祠がある。祠は前面・背面・左右面ともに壁のない構造。祠の内には白砂が厚く敷かれ、台座の上に香炉が2基、その後方に花瓶が2対置かれている。また台座の手前にも白色の円形陶磁香炉と円柱型の香炉が一基ずつ置かれている。(図13参照)。

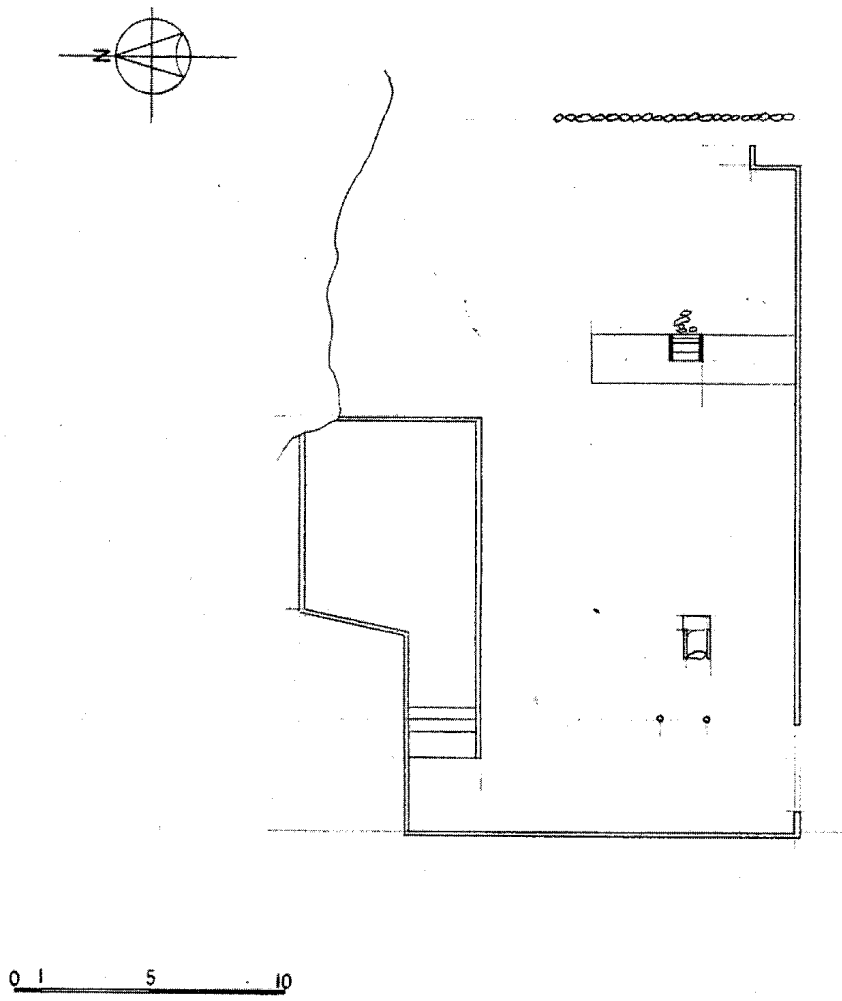
クツァに相当する空間はないが、2対の花瓶の間に白砂が盛り上げられており、そこに線香を立てて焼いた後^たがあった。これがクツァの拝所に相当する物であるかは不明。

祭神はウブウラノクウウラノンミンクタマンクヌチ（大浦野小浦野ンミンク玉ンク主）。この神名からすると浦野地域を守護する神であろうか。「ンミンク玉ンク」の意味が肝要であるが、分からない。クニティの祭祀が行われる。この祭祀が行われることからすると健康守護、さらには家内安全守護の神かと思われる。旧ウラヌ村に関わるウアンであろう。

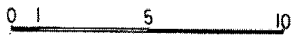
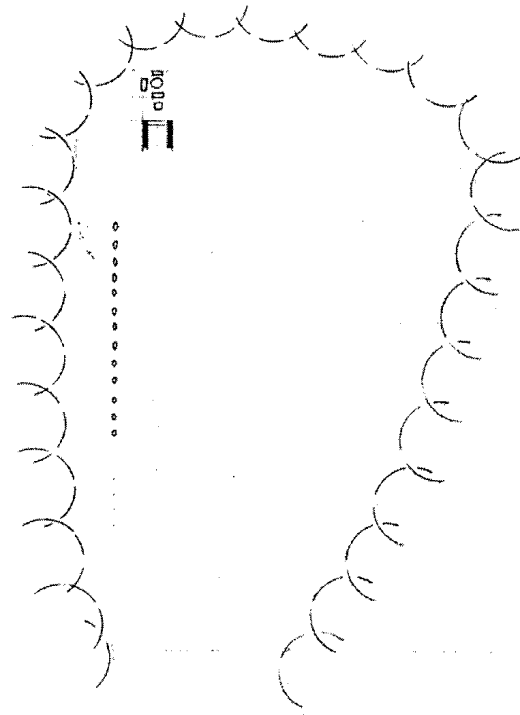
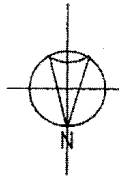
(2) トゥニ・ビディリ・その他の拝所と祭祀

与那国島の祭祀場⁽¹⁸⁾で、八重山の他の地域と異なるように見えるものに、ビディリとトゥニがある。たしかにこの名称のみをみると与那国島に独特の祭祀場のようにも見えるが、実はそうではない。

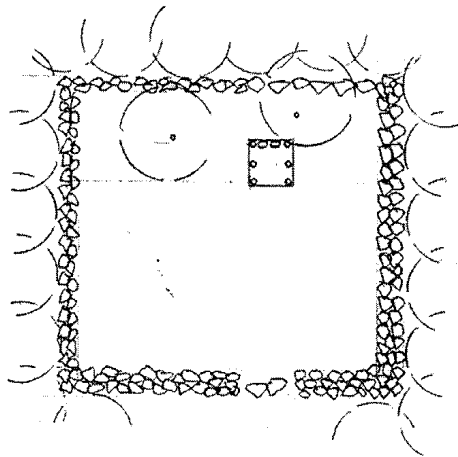
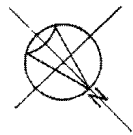
ビディリは、一口で言えば、霊石ということになるが、これは沖縄諸島でビジュル、八重山の他の地域でビッチリ、ビッチン、ビジリなどと呼ばれるものである。この霊石にまつわる信仰がどのように形成されたかについては、原始的な性石信仰（陽石・陰石に対する繁殖祈願）⁽¹⁹⁾の変化とみる考え、仏教



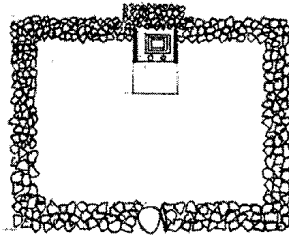
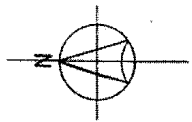
〈図10 クブラウアン〉



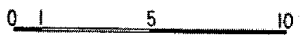
〈図11 インディウアン〉



〈図13 ウラヌウアン〉



道路



〈図12 ンダンウアン〉



〈写真9 クブラウアン〉



〈写真10 ンディウアン。左手に
クバ製の香炉が並べられている。〉

の賓頭盧信仰の影響で成立したものとする考⁽²⁰⁾えなどがある。信仰現象的には、豊作・豊漁・雨乞い・航海安全などの他、子授け・子どもの健康祈願などの対象として拝まれているようである。例えば、八重山西表島では稲作の豊穰を祈るため、種子取りの日にビジリの前にご馳走を供え、「種子取りのアヨー」を謡⁽²¹⁾って祈願を捧げたという。与那国島のビディリ信仰には、沖縄各地でそれぞれに語られるビジリ信仰のより原初的な姿が集約的に残っているように観られる。

与那国島のビディリには幾つかの種類がある。『与那国島の民俗と暮らし』によるとビディリは屋敷の拝所であり、それ以外にも「多くの種類があり、島の中には村祭のビディリ、アミウリビディリ、牛願いビディリ、田、畑のビディリなどが点在している」。家の屋敷で祀るビディリは「母屋のカンダ(上手)に祭壇をつくり、珊瑚の石を神体として祀り、香炉、花生け一对、湯呑一对をおき、毎月朔日、十五日にははき清めて拝礼し、また年中行事その他すべての家の行事の際にも祈願する⁽²²⁾」ものである。これらのことからみて、与那国島のビディリ信仰が、個人の家⁽²²⁾の安全と繁栄に発して、集落の繁栄、雨水の豊潤、牛馬の繁盛、農作物の豊穰という、あらゆる幸福を祈るものであることが分かる。

屋敷のビディリは大体が5、60センチ程度の小型の岩石である。これに対し、ムラマチリトゥニのそれは大型化している。ウラマチリトゥニやندانマチリトゥニのビディリはトゥニ入口に設置されているが、高さは大人の身長を越える程で、幅・厚さともに数十センチメートル前後の、山から掘り出した巨石である。ムラマチリトゥニのビディリをこのように巨大化するようになったのは昭和52年からである。古いビディリは高さ1メートルにも満たない程度のものであったという。

本稿ではムラマチリトゥニのビディリを採り上げて説明する。

トゥニは日本古語のトネを語源とする。日本古語のトネは「村・里の有力者。その土地の長(おさ)⁽²³⁾」を言う語から出発したものとみられるが、その第一の語義を保有するのが八重山各地におけるトゥニムトゥ、与那国島のトゥニなどの語であろう。これらは大まかに言えば村の御嶽祭祀集団の宗家(例えば西表島古見ではアカマタ・クロマタ・シロマタの三神を祀る集団の

宗家を言う)や「血族の祭祀集団の宗家」を意味する。⁽²⁴⁾

トゥニムトゥ家はまたトゥニムトゥヤーとも呼ばれるように家屋の形態を有する。これは与那国のムラマチリにおける各集落のトゥニについてもそのまま当てはまることである。現在のウラマチリトゥニやندانマチリトゥニは家屋構造を示す物であり、ンマナガマチリマイヌトゥニ・ツイヌトゥニも古い石垣囲いしか残っていないが、これが住居の壁を成していたことはすぐに推測できる。これらのトゥニムトゥ、トゥニは祭祀の起点となり、主祭場の一つとなるところである。本稿ではムラマチリトゥニについて簡単に紹介したい。

ビディリ、トゥニの他にも幾つかの祭祀場があるが、これらについては分類的な民俗呼称はない。本稿では、その他の拝所として末尾にまとめてごく簡単に紹介する。

1) クブラマチリアガリヌトゥニ (久部良祭り東のトネ)

クブラマチリ (久部良祭り) の祭場。道路脇に東西に小さく開かれた空き地にガジマルの木が一本生えているだけである。祭場の床面はコンクリートが敷かれている。ガジマルの根本に、線香を立てるための砂盛りが設けられている。この祭場で拝礼を行った後にイリヌトゥニに移って、そこで供物などを飾って本格的な祭礼を行う。(写真11参照)。なお、以下の祭場におけるムラマチリの祭祀と儀礼過程などについては『沖縄の神歌(Ⅲ)―八重山諸島⁽²⁵⁾』、拙稿「与那国島の祭祀と歌謡」⁽²⁶⁾などをご参照いただきたい。

2) クブラマチリイリヌトゥニ (久部良祭り西のトネ)

クブラマチリの祭場。トゥニの奥処にサンゴ石灰岩の石柱(高さ70～80センチ程)が立っている。これがビディリである。周囲は低いブロック塀で囲まれ、床はコンクリートが敷かれている。マチリの時にはトゥニの前の道路でドゥンタが行われる。クブラマチリの主祭場である。(写真12参照)。

3) インディマチリトゥニ (ンディ祭りトネ)

比川部落で行われるンディマチリの主祭場である。

4) ウラマチリトゥニ (ウラ祭りトネ)

祖納部落の東南地域に所在。およそ100坪程の敷地の東南の隅にビディリの大石が立てられている。敷地の西南部には約20坪の祭屋(祖納東公民館)

がある。祭儀はこの建物の中で行われる。ウラマチリの主祭場である。(写真13参照)。

5) ティダンドゥグル (太陽所)

祖納集落のほぼ中央部、与那国町役場の西隣に位置する。道路の交差点になっている。与那国島の創世神話の舞台である。ウラマチリで祖納集落の旧家でタママチリ⁽²⁷⁾の行われる与那原家・祖納家・長若家・大俣家を巡行したツッカーから神女集団がウラマチリトゥニに戻るとき、ここで一時立ち止まり簡単な拝礼を行う。(写真14参照)。

6) ンマナガマチリマイヌトゥニ (島仲祭前のトネ)

ティンダバナ台地の西方部に位置する旧島仲村の跡地にある。サトウキビ畑などの農耕地に囲まれた約200坪程の方形の空き地で、東南隅にビディリの石柱が立っている。北西寄りの所に方形に石垣で囲われた場所がある。石垣には南向きに開口部があり、その内側にツッカーの座がある。推察するに住居遺構が祭祀場となったものであろう。マチリの時にはこの石垣囲いとビディリ⁽²⁷⁾の間に筵を敷いて、公民館役員・来賓らの座席とする。ンマナガマチリは、マイヌトゥニ→アラガウアン→ヌックイタビシ→ンマナガマチリツイヌトゥニ→マイヌトゥニと祭場を移動して行われる。ンマナガマチリの主祭場がこのトゥニである。(写真15・16参照)。

7) ンマナガマチリツイヌトゥニ (島仲祭後のトネ)

ンマナガマチリマイヌトゥニ (島仲祭前のトネ) から徒歩数分の所にある。周辺は農耕地であるが、トゥニは雑木に囲まれている。方形の石垣に囲まれ、開口部から中にはいると正面奥処に火の神が祀られ、左手奥処にビディリの石柱が立っている。推察するにこれまた住居遺構を祭祀場としたものと見られる。(写真17参照)。

8) ヌックイタビシ (野底板ビシ)

旧島仲村の後方にある。この聖地のある場所は、この一帯では抜きんでて小高い所で、その頂に横長の大岩が北に向かって置かれている。この巨石は女酋サカイイソバ (15世紀から16世紀の人物) が島内の状況を視察するとき腰掛けたものと伝えられている。この巨石に向かって祭礼が執り行われる。ンマナガマチリの祭場の一つである。

9) ンダンマチリトゥニ（帆安祭りトネ）

島の中央部、旧ンダン村の跡地にある。数十坪程の屋敷に、コンクリートブロックの壁でトタン葺きのトゥニの建物がある。この建物に対面して大型の山石のビディリが立てられている。ムラマチリの時、ンダンマチリの主祭場である。このトゥニから離れて前方に与那原家トゥニ、左方に祖納家トゥニがある。（写真18・19参照）。

10) ミドゥディダマ（ミドゥディ山）

ンダンマチリトゥニの南東方向およそ2キロメートルの山林中にある。大きな岩陰にビディリが置かれている。1989年、ンダンマチリトゥニ方面からの道が新たに開通し、往来に車両が用いられるようになったが、それまでは祭祀参加者は徒歩での移動を余儀なくされていたという。神域床面にはコンクリートが敷かれている。ンダンマチリの当日、ンダンマチリトゥニでのアサカダイ祭祀（早朝の神祭り）の後の祭祀がここで行われる。（写真20参照）。

11) ハイナグ

祖納集落から島の中央部のンダンに向かう途中にある。宇良部山の麓で、正面には山の頂上部がのぞまれる。道路脇にビディリが立てられており、拝所であることが分かる程度である。ンダンマチリの際、祖納村からンダンマチリトゥニへ向かう途中と、ンダンマチリの一夜籠もりの祭礼を終えてアンタドゥミの祭礼の時、ンダンマチリトゥニから祖納の集落へ向かうときに拝礼がなされる。拝礼はツカーらの祭祀者が道路端に座し、盛り上げられた路肩側にあるビディリに向かって行われる。これをカンバガリ（神別れ）と称している。（写真21参照）。

12) ティラクンダ

旧ンダン村跡からハイナグを経て祖納村に到る途中にある。周辺はサトーキビ畑で、その間を走る草に覆われた農道の脇にある。聖域であることを示すのは小さなビディリの石だけである。ンダンマチリの一夜籠もりの祭儀が明けて、ンダンマチリトゥニから祖納の集落に向けて移動する時に行われる祭祀の場である。ここでの祭祀はヌチバガリ（主別れ）と呼ばれる。25日間にわたって行われたカンブナガの終了を告げる祭祀である。ティラクンダからトゥヤマウアンまでの道行きには、ンヌン（太鼓）、カニン（ドラ）が打

ちならされ道歌が歌われる。ティラクンダはチラクンダとも発音されるようである。(写真22参照)。

13) ダティグチディ (ダティグ頂)

祖納集落から島の東端のアガイ崎に行く途中、小字ダティグ (屋手久) の岡にある。諸船の往来を監視する遠見番が置かれたところである。方位石が置かれ、旧暦8月の最初の丙子の日にダティグクイの祭儀が行われる。

この地はかつてダティグ村があったところという。ダティグ村はサンアイイソバがその兄弟に統治させていた四つの村のうちの一つであったが、鬼虎の乱の時に宮古の仲屋金盛によって焼きはらわれたのだ⁽²⁸⁾という。

14) アンアイハマティ (東の小浜)

田原川の上流から300メートル程下った所にある。かつて高潮の被害を受けたことのある土地である。祖納各村のアラミディ (新水) の祭祀が行われる。(写真23参照)。

この地は祖納村発祥の地と言われる。『与那国の歴史』はこれを1500年におこったオヤケアカハチの乱に連動することとして、次のように説明している。「仲屋金盛の与那国入りによって旧邑ドゥナンバラ村及びダティグ村は焼きはらわれたので、その住民はウラヌ・ダイに移住したが、その後、近くの田原の沼沢や波多入江の便利を悟って、祖納地区に移動を開始したのである⁽²⁹⁾」。このような事情によって、この地で、一年の水が豊かで順調であることを祈る祭祀が行われることになったのであろう。『与那国の歴史』によると現在のアンアイハマティには、祖納部落のトゥニ、西表と関係のある大嵩家、慶来慶田城家と関係のある前松田家、村の拝所であるウブン・スアテ、玉祭りの本家である大俣家、玉祭りの祭場であるナブガ家・野底家・祖納家 (祖納家は西表とも関係がある)、村の旧家とされるアニシカ家の旧跡などが集中しており、「祖納部落発祥の地であり、当時西表島と関係のあったことを物語るものである⁽³⁰⁾」という。

15) ナンタハマ (ナンタ浜)

祖納集落の前の浜の呼称。かつてはこの浜から船出した。現在はコンクリートの防波堤が築かれ、浜には階段を使って下りるようになっている。かつて湊口にあった小島は橋でつながれ、大型船の停泊が可能なバースとなっている。

る。農耕に害を及ぼす虫や獣を祓う祭儀であるカドゥムヌン（カド物忌み）で、害虫・害獣を本貫の地に送る祭祀が行われる。

陸地側にトゥヤマウアン、ティウアン、トゥマイウアンがある。（写真24参照）。

16) クンマ

祖納集落の南東方向の小字クンマ（貢馬）にある。農作物のつつがない成長を祈るツァバムヌン（草葉物忌み）と稲穂の実りを祈るフームヌン（穂物忌み）の祭祀が行われる。

17) ンマバナ（ンマ端）

久部良集落の北東方約2,5キロ（与那国空港西端から北西方向に約700メートルの地点）のンマバナサティ（馬鼻崎）は島の最北端である。一帯はトゥグル牧場（現在は北牧場と呼ばれる）となっている。そのンマバナの地にある拝所である。祖納・比川・久部良が共同で行う、収穫した稲を貯蔵した後にスズメやネズミなどの害を受けないように祈るドゥムヌムヌン（ヨモ＝害鳥・害獣の物忌み）の時の祭祀場である。サンバルのビディリとも呼ばれている。

18) ンマナガ（島仲）

旧島仲村の拝所。ツァバムヌン（草葉物忌み）、フムヌン（穂物忌み）の祭祀が行われる。

19) トウグルハマ（トウグル浜）

祖納集落の西方、与那国空港の東端にある河口部の西側部の浜である。古くから魚介類が豊富に採れたという。旧島仲村の行うツァバムヌン（草葉物忌み）、フムヌン（穂物忌み）の祭祀場。ちなみに1845年、与那国に来航したサラマング号はこの地に投錨し、上陸した水兵達が食料として提供された牛を轟音一発のもとに倒し、島民を仰天させたという挿話が伝えられている⁽³¹⁾場所である。21) ウチニガイビディリの項参照。

20) ムヌンキハマティ・カタバルハマ（物忌み小浜・潟原浜）

比川集落の西方、現在エビ養殖場の西側の海岸線にある。比川村のツァバムヌン（草葉物忌み）、フムヌン（穂物忌み）の祭祀場。なお、「当日、比川の人々は重箱にごちそうを詰め、物忌みの行事を行ったあと、かたぶる浜

の波打ち際を南から北へ10数頭の馬を並べて競馬が行われるのを楽しんだほか、相撲大会も催され、終日にぎわった⁽³²⁾」。

21) ウチニガイビディリ (牛願いビディリ)

かつては北牧場の西、与那国空港滑走路の西端近くの海岸・フランダにあったが、現在はトゥグルの牛のセリ市の北側、ムムタバル (桃田原) の橋の近くにビディリを移し、祀っている。牛のつつがない生育・繁殖を祈願するウチニガイ (牛願い) の祭祀が行われる。

22) クブラバリ (久部良割れ)

久部良集落の北、久部良中学校のさらに北の海岸線に位置する。クブラフルシ (久部良黒石) と呼ばれる、黒色の岩石が露出する場所にある、長さ15メートル、幅1～3.5メートル、深さ約7メートルの岩の割れ目。割れ目の下は海岸の砂地。久部良集落のツツァバムヌン (草葉物忌み)、フムヌン (穂物忌み) の祭祀場。

なお、この地には伝説があって、人頭税に苦しんだ与那国では、島中の妊婦をこの地に集め、この割れ目を跳び越えさせるようにしていたという。そのため仮に成功した場合でも流産、失敗した者は墜落死するなどし、これによって人口を調節したものという。(写真25参照)。

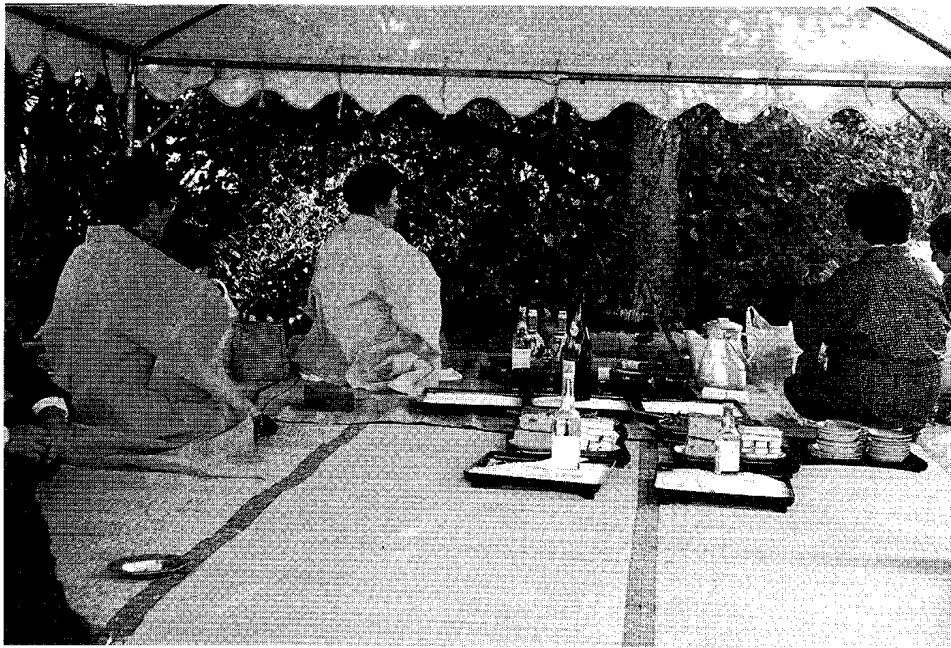
23) 田原川水くみ場

田原川の上流地点にある。旧暦8月に行われるアラミディ (新水) の祭祀が行われる。

2、神役組織

ウアンの祭祀を司祭するのはツカアブ (司姥) である。「与那国島の司の始まりは富里家の祖先に当るムトカ・ハマイであると言われている。その年代は不明であるが、墓は祖納村西区の後方村外れにあつて、アラガ・ダト・タガビの日には、村の世話役が墓地の清掃を行い、司及び部落総代の礼拝が行なわれ⁽³³⁾」たという。

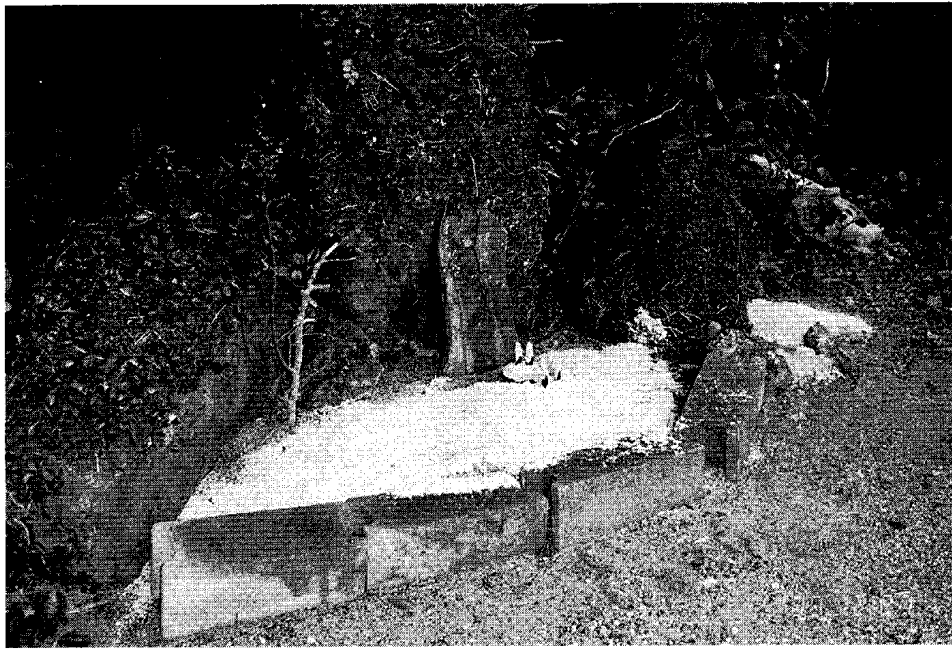
本来、各ウアンにはこのツカアブが居るべきであるが、現在は与那国全体ではクブラウアンのツカアブである仲吉ヨシさんのみである。私自身が調査した1990年のカンブナガの時点までは仲吉さんの他に、祖納部落関係のウア



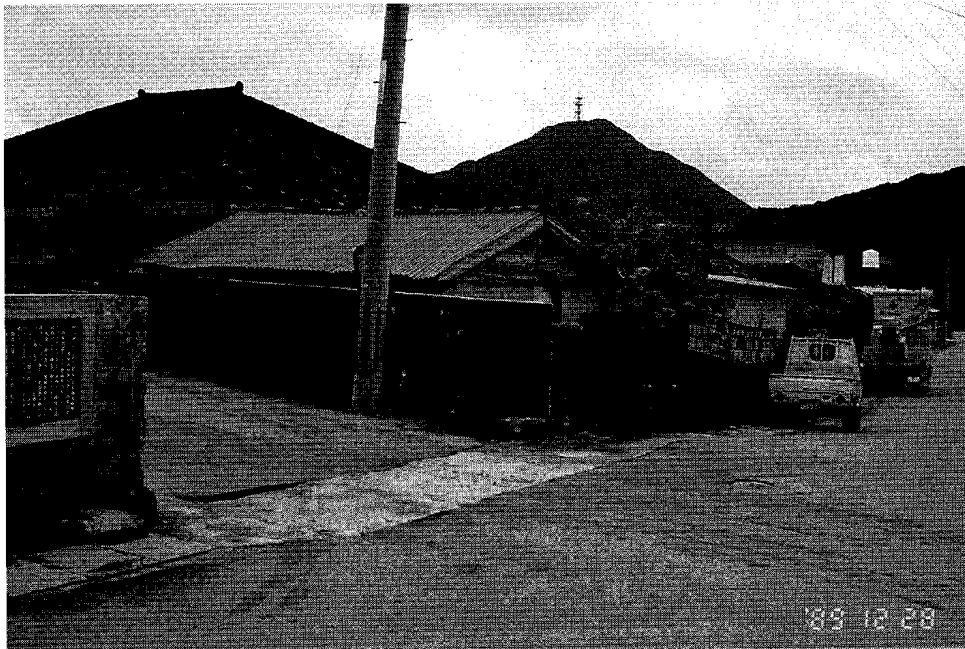
〈写真11 クブラマチリアガリヌトゥニ〉



〈写真12 クブラマチリイリヌトゥニ。中央の石灰岩柱がビディリ。〉



〈写真13 ウラマチリトゥニのビディリ。前方のものは以前のもの。
後方のものは新に立てられたもの。〉



〈写真14 ティダンドクル。後方はウラブ岳〉



〈写真15 シマナガマチリマイヌトゥニ〉



〈写真16 シマナガマチリマイヌトゥニ〉



〈写真17 インマナガマチリツイヌトゥニ〉



〈写真18 インダンマチリトゥニ。ツカーの後方の石がビディリ。
左手の建物がトゥニの家。〉



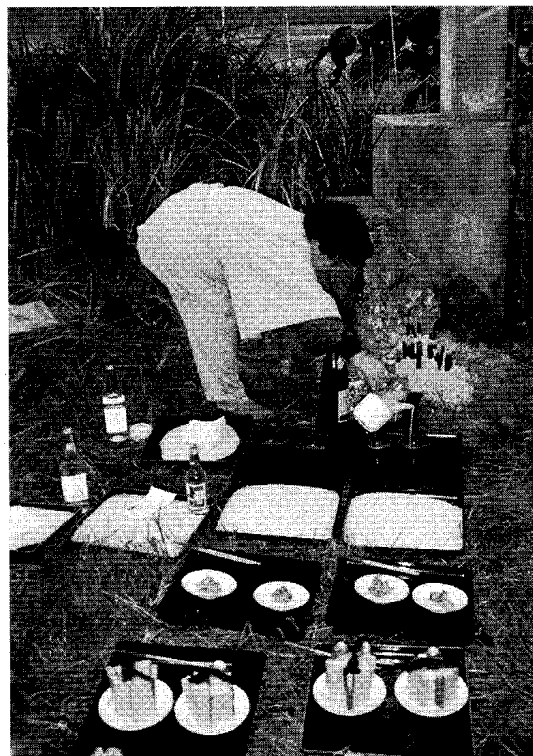
〈写真19 ンダンマチリトゥニの内部での祭祀〉



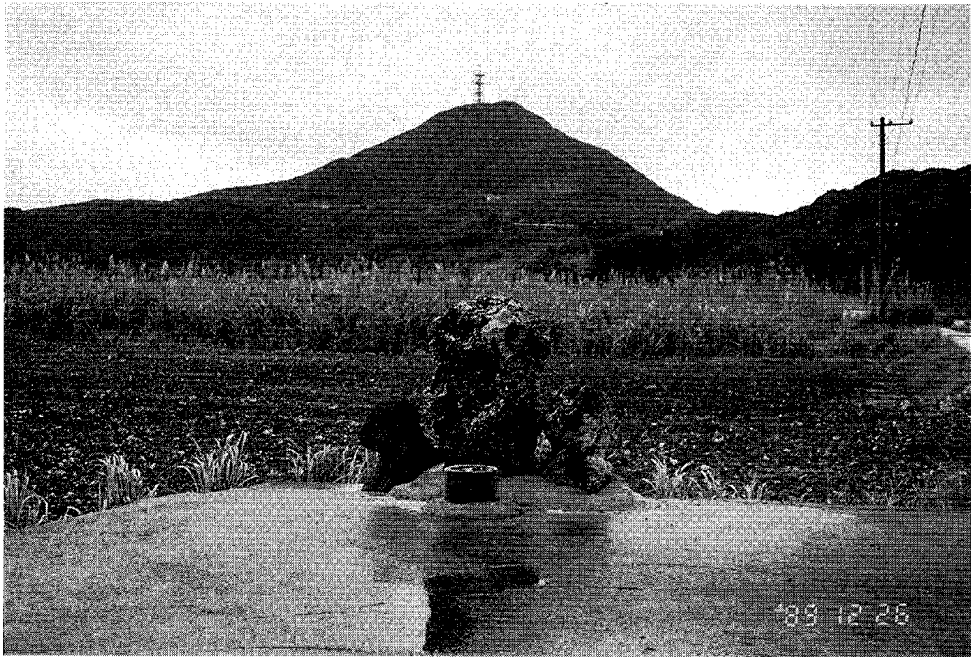
〈写真20 ミドゥディダマ〉



〈写真21 ハイナグ。正面の山はウラブ岳〉



〈写真22 ティラクンダ〉



〈写真23 アンアイハマティ〉



〈写真24 ナンタハマ。正面の山はウラブ岳〉



〈写真25 クブラバリ〉

ンの祭祀を担当するツカアブである玉城喜代さん、旧島仲村関係のウアンの祭祀を担当するツカアブである阿良静江さんと、都合3人のツカアブがいた。しかし、それとて、各御嶽にツカアブが居り、その下に下役の神女やティディビなどの男性神役がいるという、本来の有り様からは相当に隔たったものであった。現在は更にその神女不在の状態が進行して、今や神女組織が消滅の寸前にまで至っているということである。

各ウアンのツカアブを統括し、与那国の祭祀組織の最高位にあったのがトゥヤマウアンの祭祀を司祭するウブッカ（大司）である。この神役も空位になってかなりの時間が経っている。残りの各御嶽の司祭・ツカアブはウブッカに下属するものと理解され、スバッカ（側司）と称されていた。

また、ツカアブと共にウアンの祭祀に関わる男性の神役がいる。ティディビである。この神役は八重山全域の御嶽にあるもので、地域によってティジリイベー（古見）・ティジリビー（鳩間）・ティズリビ（黒島・竹富）・チンチビ（小浜）、カンマンガー（石垣島各字・西表祖納・星立）などと呼ばれている。テズリベ（手摺り部）という語が語源で、祈願する者という意味である。『おもろさうし』（1531年～1623年に成立。首里王府編。古琉球時代の祭祀歌謡集）に「祈る」の対語として「てずる」（手摺る）が頻出する。

カンマンガーは「神と真正面⁽³⁴⁾で向き合う者」の意であろう。この男性神役も比川部落のウアンのティディビを勤めた泊祖良氏を最後として存在しない(1990年時点では泊氏の奥様が代役を勤めていた)。

このように与那国島の祭祀組織は各ウアンのツカアブ・ティディビの空位状態が長く続いており、危機的状況、もっと厳しい言い方をすれば消滅寸前の状況にあるということになろう。なお、各ウアンの祭祀および信仰習俗を具体的に担うダマシンカ(山臣下=御嶽祭祀集団)についての詳しい調査は未だ行っていない⁽³⁵⁾。その結果によって、与那国島の御嶽信仰習俗の実態が鮮明となるにちがいない。

(「3、与那国島の祭事」以下は次号以下に掲載予定)。

〈注〉

- (1) 与那国方言の琉球方言における位置づけについては、例えば津波古敏子「琉球方言区画」(『沖縄大百科事典』1983年 沖縄タイムス社)、外間守善『沖縄の言葉と歴史』(2000年 中央公論社 pp. 324～342)など参照。
- (2) 沖縄県教育委員会が昭和58～59年度に行った「御嶽信仰習俗分布調査」の一環として、1984年8月、与那国島の御嶽の調査が実施された。調査員は玉城政美・玉城義実・大城學氏と波照間永吉。その成果は『沖縄県文化財調査報告書第70集 御嶽 御嶽信仰習俗分布調査(Ⅱ)―宮古諸島及び八重山諸島―』として1985年に刊行された。
- (3) 沖縄県教育委員会が昭和62年度から5カ年に亘って行った「沖縄の神歌伝承活動調査」の一環として、平成1年度に与那国島のカンブナガの調査が実施された。調査員は森田孫榮氏と波照間永吉。その成果は『沖縄県文化財調査報告書第95集 沖縄の神歌 沖縄の神歌伝承活動(Ⅲ)―八重山諸島―』として1990年に刊行された。
- (4) 与那覇仁一は前掲注(2)(3)の他、波照間による1996年夏の豊年祭、2003年冬の与那国民謡調査にも同行、調査に協力した。
- (5) 前掲注(2)書参照。なお、同書での与那国島の各御嶽に関する説明は玉城政美氏の執筆にかかるものである。本稿の各ウアンの現況・様態等については、同書の記述を参考にした。

- (6) 与那国島の御嶽信仰および祭祀については前掲注(2)(3)(6)書その他、池間栄三『与那国の歴史』(1972年再版 琉球新報社)、与那国町教育委員会『与那国町の文化財』(1986年 与那国町)、与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』(1988年 与那国町教育委員会)などを参照。なお、ウタキ・ウガン・ウアン・オン・ワン・ワーなど御嶽を表す語の語義や、八重山全体の御嶽信仰等については、拙著『南島祭祀歌謡の研究』(1999年 砂子屋書房) p.15参照。
- (7) 前掲注(6)の池間栄三『与那国の歴史』 pp.174～176、および p.136参照。
- (8) 前掲注(6)の与那国町教育委員会『与那国町の文化財』 p.34参照。
- (9) 前掲注(8) 書 p.18参照
- (10) 前掲注(7) 書 p.136参照。
- (11) 同上。
- (12) 同上、p.113。
- (13) 同上、p.112。
- (14) 同上、pp.73・74。
- (15) 前掲注(8) 書 p.12参照
- (16) 前掲注(7) 書 pp.135・136参照
- (17) 同上 p.135参照。
- (18) 与那国島の村落祭祀の行われる聖地については、前掲注(6)の与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』と『総合調査報告書VI—与那国島(よなぐにじま)—』(1989年 沖縄県立博物館)が参考になる。
- (19) 真栄田義見・三隅治雄・源武雄編『沖縄文化史辞典』(1972年 東京堂出版) p.212参照。
- (20) 平敷令治「ビジュアル信仰」『沖縄大百科辞典』(1983年 沖縄タイムス社) 下巻 p.298。
- (21) 牧野清『登野城村の歴史と民俗』(自家版 1975年) p.126参照。
- (22) 宮良保全『与那国島の民俗と暮らし 第一分冊 — 住居・墓・水 — 』(2000年 与那国町教育委員会)
- (23) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典』(2001年 小学館)の「とね」の項参照。
- (24) トゥニムトゥについては前掲注(6)の拙著収録の「西表島古見のプーリィ

- の祭祀と歌謡」、前掲注(19)書のp. 280等参照。
- (25) 前掲注(3)の『沖縄県文化財調査報告書第95集 沖縄の神歌 沖縄の神歌 伝承活動(Ⅲ)―八重山諸島―』pp. 135～174参照。
- (26) 前掲注(5)の拙著収録「与那国島の祭祀と歌謡」参照。
- (27) 前掲注(7)書 pp. 62・63参照。
- (28) 前掲注(7)書 pp. 57・73参照。
- (29) 前掲注(7)書 p. 57参照。
- (30) 同上、p. 58参照。
- (31) 与那国町史編纂委員会事務局『与那国町史第1巻 交響する島宇宙 日本最西端 与那国島の地名と風土』(2002年 与那国町役場) p. 117参照。
- (32) 前掲注(31)書 p. 115参照。同書p. 113の大地図にはムヌンキハマティが異なった地点に記されているが、これは誤り。大地図の下の拡大図が正しい。また、この大地図にはカタブルハマの中央よりの所にムヌンシハマの名が見えるが、これも下の拡大図にはなく、誤りかと思われる。
- (33) 前掲注(7)書 p. 113参照。
- (34) 八重山におけるティディビなどの男性神役については前掲注(5)の拙著収録「オン(御嶽)の祭祀組織」pp. 60～67参照。
- (35) 与那国島のダマシンカについては渡辺欣雄・植松明石編『与那国の文化―沖縄最西端与那国島における伝統文化と外来文化：周辺文化との比較研究―』(1980年 与那国研究会) p. 79に若干の記述があるが、未解明のままである。
- (よなは よしかず・与那国町役場産業振興課課長補佐)
(はてるま えいきち・沖縄県立芸術大学附属研究所教授)

【与那国島の聖地（拝所）地点図】

